



月次祭 4月17日(月) 午前10時～
婦人会例会 4月9日(日) 午前10時～



3月16日におぢばの桜を撮影に帰らせて頂きました。神殿東側の桜並木が見事でした。今年もライトアップがされるようですので、時間があれば夜参拝して別席場前のしだれ桜を楽しんでみるのもいいと思います。

不思議な物で、綺麗な花を愛でていると不思議なところは落ち着き日頃の生活でのいやなことも忘れさせてくれます。短い時間美しく咲く桜は特にその樹に出会いに行くこともあります。一本桜。並木道となっている桜ではないけど、こんなところで咲いているのかと出会ったときに感動を覚えることがあります。最初は見つけられなかったのに、風に運ばれてきた花びらを見て、ああ、こんなところで頑張ってる咲いていると。

満開の旬に行くことが出来なかった年は、来年会いに来るよ、そのときまで元気だと、こころで願うこともあります。

およそ40年前に植えた教会の桜が昨年枯れました。子どもたちの成長を見守り、3年前まで満開の花を楽しませてくれた桜。ソメイヨシノは、樹齢が短いそうです。

枯れた原因は虫による物のようで、気がついたときはすでに遅かった。寂しいですね。

今年の剪定で切り株として残すことにしますが、その綺麗に咲いていた姿は忘れることはないでしょう。



162.親が代わりに

教祖は、平素あまり外へは、お出ましにならなかったから、足がお疲れになるような事はないはずであるのに、時々、

「足がねまる。」とか、「しんどい。」とか、仰せになる事があった。ところが、かよう仰せられた日は必ず、道の子供の誰彼が、意気揚揚として帰って来るのが、常であった。そして、その人々の口から、

「ああ、結構や。こうして歩かしてもろても、少しも疲れずに帰らせて頂いた。」と、喜びの声を聞くのであった。これは、教祖が、お屋敷で、子供に代わってお疲れ下された賜物だったのである。神一条のこの屋敷へ帰って来る子供が可愛い余りに、教祖は、親として、その身代わりをして、お疲れ下されたのである。ある時、村田イエが、数日間お屋敷の田のお手伝いをしていたが、毎日かなり働いたのにもかかわらず、不思議に腰も手も痛まないのみか、少しの疲れも感じなかった。そこで、

「あれだけ働かせてもらいまして、少しも疲れを感じません。」

と、申し上げると、教祖は、

「さようか。わしは毎日々々足がねまってかなわなんだ。おまえさんのねまりが、皆わしのところへ来ていたのやで。」

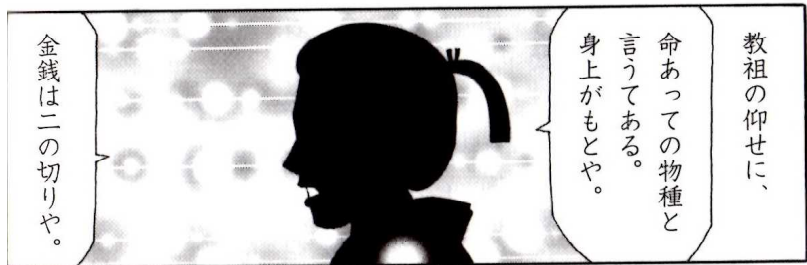
と、仰せられた。



179.神様笑うてござる

ある時村田イエが、動悸が出て次第に募ってきて困ったので、教祖にお伺いしたところ、「動悸は神様胸がわからん。と言うて笑うてござるのやで。」とお聞かせ下された。

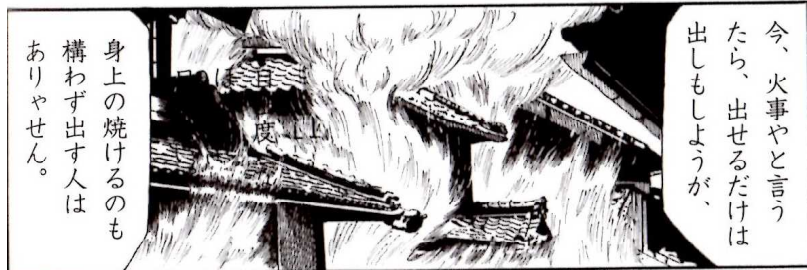
逸話篇 一七八 「身上がもとや」



金銭は二の切りや。

命あつての物種と
言うてある。
身上がもとや。

教祖の仰せに、



身上の焼けるのも
構わず出す人は
ありやせん。

今、火事やと言う
たら、出せるだけは
出しようが、



盗人ぬすびとが入つても、
命が大事やから、
惜しいと思ふ金でも
皆出してやりますやろ。

大水やと言うても
その通り。



と。これは、
喜多次郎吉によつて
語り伝えられた、
お諭しである。



そこで、二の切りを以て
身の難救かつたら、
これが、大難小難
という理やで。
よう聞き分けよ。

惜しいと思ふ金銭、宝
残りに、身を捨てる。
これ、心通りやろ。

それに、惜しい心が強いというは、
ちようど、焼け死ぬのもいとわず、
金を出しているようなものや。

悩むところも同じ事や。
早く、二の切りを惜しまずに施し
して、身上を救かからにやならん。